

『獄中記』と『レディング監獄の唄』 における「語り」

玉井 暲

(大阪大学助教授)

ワイルドの晩年の2大作品『獄中記』と『レディング監獄の唄』は、他の作品とは異なり、作者自身の2年間にわたる獄中生活という事実を抜きにして語ることは難しかろう。事実、この2作品は作者のそうした個人的経験と余りにも短絡的に結びつけられて論じられて来たさらいがある。ことに『獄中記』の場合はそうだ。作者と愛友ボジーとの交際の記録、獄中の作者の内面が吐露された告白の書、作者の芸術・人生・世界観などが窺い知ることのできる一種のエッセイといった具合に、いわば信頼に足る「資料」としての扱いを受けてきたように思われる。しかしその反面、これらの2作品がひとつの創造的な芸術作品として認知されていることもまた事実なのである。

今、この2作品が文学作品としての広がり、開放性を持つとすれば、それはどこに求められるのか。このような関心から、2作品をひとつのパースペクティブの下において見る試みとして、「語り」に焦点をあてて考えてみたのが本発表である。この時留意すべきは、投獄という主題の重みとともに、それを表現すべく採られている「私信」及び「バラッド」という形式の持つ意味である。「獄中記」はボジーに宛てた私信だが、これを作者自身を語り手「私」とする作品と見ることにしよう。「私」は、悲哀と恥辱の中で投獄という運命の意味を探り、新生のヴィジョンにたどりつくまでの conversion の軌跡をかつての愛友に語ってゆく。「レディング監獄の唄」では妻を殺した罪で投獄され絞首刑に処せられた青年が主人公になっていて、語り手「私」が、同胞の囚人とともに苦悩の境遇に身を置きながらも、ひとりの証人としてこの青年の生涯を世に語り伝えるべく唄うという形になっている。いずれも、語ることによって現出する文学空間、語りの空間は、まさしく、作者の生々しい個人的経験に関わる主題とこれらの表現形式とが激しくせめぎ合い複雑に絡み合う場となっている。

『獄中記』は三つの段階をへて展開する。まず語り手は、破滅への契機となったボジーの存在をめぐって、彼の人格上の欠点を表わすエピソードを集積する。例えばワーキング滞在中、彼の看病をして逆に流感に患った時の悲惨な状況を詳細に紹介し、エゴティズムや浪費癖を批判する。単なる集積作業と言うよりは、その種のエピソードを繰り返し語ることによって「非のあるボジー」という像の形成に着手しているのだ。前半は概ねこの営みに費されていると言えよう。次に、語り手は語りの矛先を転換する——「結局は私は君を許さねばならないということだ。」非のあるボジーを許す心境に至った語り手は、わが身を殉教者、そしてキリストになぞらえるかのように、全てを甘受する存在としての「私」について語る。最後は、新生へのヴィジョンを語り、「多分私は、悲哀の意味、悲哀の美

を君に教えるために選ばれたものだろう」と終えている。

「私」のたどり着いたヴィジョンは我々の胸をうつ。その理由を考えてみると、全てを甘受する境地にいる「私」が感動的であるためであろう。しかしこのイメージが鮮明であるためには「非のあるボジー」という前提が不可欠の条件である。しかもボジーの「非」なるイメージが強烈であるほど一層効果的であろう。また逆に、ボジーの存在が反発をさそうほどの圧倒性をおびているとしたら、それはまさしく非のあるボジーを許す「私」の存在がいじらしくも強く実感され得ることに依っている。ただし、ボジーの「非」に関しては真偽の程を確かめるすべはない。全ては語り手のうちにあるのだから。

こうして、ここに相互反映的とも言うべき語りの構造が指摘できる。「非なるボジー」と「全てを甘受する私」へとそれぞれ収斂してゆく2つの語りのベクトルが相互に対抗・牽引し合う過程の中で、語りの空間が現出してくるのだ。文学作品として開かれる所以がここに求められよう。ところで、この語りの空間の確保と維持には、例えば結末近くでボジーの「非」に繋がるエピソードが繰り返し言及されている点からも窺えるように、「反復」が大きな役割を果たす。

『獄中記』が私信のいわば自閉的側面を最大限に活用した作品とすれば、『レディング監獄の唄』は、逆にバラッドというコンヴェンショナルな枠組の中に主題の痛ましさを封じ込めることで、詩的ヴィジョンの伝達を図った作品と言えよう。ここで見逃せないのは、語り手「私」として獄中生活者が選ばれていることだ。これは何でもないのであるように見えるが、『獄中記』との比較で考えてみると興味深い点が判る。内側からの視角に基づいて「投獄」を描く点では同じである。しかし語り手がいま語るよう要請されている対象は、ボジーのような全て主観の意識に還元できる状況にいる友人ではなく、殺人犯という完全な他者である。確かに詩の冒頭では「私」は一定の距離を置いてこの死刑囚を眺めている。ところが詩が展開してゆく中でこの両者間の距離の消滅が起る。「私」は、殺人犯の処刑日が近づくにつれ、彼の罪をわが罪のように感じる(Ⅲ:91—92)。処刑の後には、彼に代って処刑されてもよかったなどと思うようになる(Ⅳ:27—28)。こうして、両者間で意識の同化・一体化が行われ、「私」の罪=殺人犯の罪という等式の成立を見る。こうなると、殺人犯は、「私」(および仲間の囚人)の罪をあがなうために身代りとなって処刑された殉教者である。以後このイメージは一層強化されて、末尾のリフレインでもってこの詩は円環を閉じる。かくしてこの詩には、囚人の語り手の起用により、主人公の死刑囚についての語り手と、語り手「私」の自己についての語り手は相互に通じ合うのだという論理を保証する装置が設けられることになったのである。ここに、「投獄」という深刻かつ悲痛な主題をバラッドに盛り込むことを通して詩的ヴィジョンへの昇華をはかるその仕組みが見出せよう。ところで、この詩の中には、いみじくも作者自身が漏らした言葉を借りるならば、「プロバガンダ」的な語りを展開させた部分がある。これが可能であったというのも、恐らくあの昇華への仕組みの保証があったればこそなのである。
